昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十六年十二月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十三巻　第十二号
（通第三九〇号）

目次

誓願の親心……近角常観……(1)
三願転入に就いて……福島政雄……(5)
菅瀬芳英師語録……西本清人……(9)
凡骨日誌抄(16)……西元宗助……(12)
耳底に残る多田先生の仰せ……白川梅次郎……(15)
念仏詩抄……木村無相……(18)
信心に就いて……花田正夫……(21)

誓願の親心

近角常観

誓願のやるせなき御親心は如何なる不思議にてましますぞ、とてもたすかるべからざる我身をば特にたすけたまわんとて日夜待ちかねたまう親心なり、必ず落つべき此身をば御身をかけて落さじと呼びかけたまう御声なり。この待ちかねたまう御やるせなき御心をいただけよ、一往二往のことならず、五劫思惟の御心をいたましめたてまつりしも、ひとえに我等が罪業深重のためなりけり。

我かって親父の臨終に訣別告白して曰く、如来様の御助け下さるのがありがとうございますと。父応えて曰く、助かられぬものを、と。この一言胸に徹して、我おぼえず枕頭にあやまりはてて曰く。嗚呼たすかられぬものを、嗚呼たすかられぬものを、嗚呼たすかられぬものをたすけたまう御親心にて在すか。御不思議、御不思議、御親心を知り顔して申せしことの恥かしさよ。助けて下さるのが有難いでは親心が分ったのではない。たすかられぬ罪業深重のこの身、物知り顔なる驕慢至極の我身をば、必ず助け救わんとて、わが不屈のいただきの折れるまで御心をば知らさずばやまじと大悲の胸を傷ましめたまいし深厚の御親心にてましませしか。知れると思うは知らぬなり、得たと思うは得ぬのなり、知らさではやまぬ御誓なり。我身かけて必ずとどけんとの御真実なり。かかるやるせなき弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生を遂ぐるの外なきなり。

「若不生者のちかいゆえ、信楽まことにときいたり」このやるせなき御誓の弓の張りつめたる御力にて我等が胸中に真心徹到したる一念、実にこれ信楽開発の時刻到来したるなり。「夫れおもんみれば信楽を開発することは、如来選択の願心より発起す」とは、まことに此やるせなき御親心によりて、遂に不孝不実の我身もはじめて大悲の御真実をいただきたる有様なり。

されば大聖矜哀の善巧というも釈尊をはじめとして大聖おの〳〵もろともに、畢竟この真心を開闡せんとて善巧の手を下したまう悲愍矜哀の御実意なり。この御真実、御実

意をいただかずんば願心を空しくするものなり。

○釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し

われらが無上の信心を、発起せしめたまいけり。

○真心徹到するひとは、金剛信なりければ、

三品の懺悔するひとと、ひとしと宗師はのたまえり

我等は信心発起の一念、真心徹到して、初めて大悲の胸を痛ましめたてまつり、待ちかねたまいし御親心に背きて反対の方角にのがれつつありし身の罪悪を懺悔するのほかなきなり。

世の人、如来を信ずという、如来はかならずよくして下さるという。あだかも病人が医師を信じて、医師はかならずよくして下さるというが如し。信ずるに違いないが、何んとやらん信ずる心に我力をいれるにはあらざるか、随てよくして下さる結果を待ちもうくる心地はあらざるか。

然れども若し、医者来りて、まず一診して、直に先ず口を開きて曰く。汝の病状はかくかくならん、汝はかくかくの病に遇いしことあるべし、かくかくの心地するならん、かくかくの傷あらん、苦あらん、と我語らざるに先だちて悉くこれを知り尽して、先意承問し、これに加えてなお我未だ覚らざる個所までも指摘して、最後に断じて曰く、何れの薬も及び難し、何れの治療も施すに由なし、是死病なり、難病なり。唯我に特薬あり、我唯この薬によりて復活、再生したる実験あり、これを与うべしと。

この時に至りてこれを信ずるに力をいれるべきや、信ぜざらんと欲するも信ぜざるべからず、結果を予想するの余地ありや。結果の如何をかえりみるの余裕なかるべし。

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。たとい地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。いずれの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし」、南無阿弥陀仏、々々々々々々。

されば如来はかならずよくして下さると信ずるというときは、未だかくの如くとてもよくならざるものをよくせんとの御誓を聞かざればなり、否、その御誓の下にとてもよくなれざる我身たることを自覚せざればなり。

仏として慈悲ならざるはなく、光明ならざるはなし。阿弥陀仏は難度海を度せんとの弘誓なり、無明の闇を破るの無碍光なり。難度海中に渡し船を得たり。あにその結果を云々するの余地あらん。敵の陣に火をともすを見て火にてはなきかと思うことを得べけんや。世の所謂、疑いながらの往生などは暗中に火を想像仮想したるの誤りなり。よくよく無明の闇を照らしたまう尽十方無碍に面したてまつるべし、大事のことなり、ことばに止らぬように頂くべし。

悪しき者を見捨てたまわぬが誓願の大悲なり。悪しきこ

とを為さしめて助けんとの親心にはあらず、親心としては一文の金をも盗むを見そなわして心を傷ましめ給うなり。しかるに我等はその親心を傷ましめたてまつる悪業をなすものなり。ここにおいてや大慈の親心は益々やるせなく、大悲の御思召しやみ難く、その為すまじきをなし、犯すまじきを犯すものに、この切々矜哀の親心を知らしめて、その罪悪を自覚せしめ、摂取の御手に収めんとて待ちかねたまうなり。この親心の子に達せざる限りは、悲しきかな未だ摂取の光明に入らざるなり。たとい親心ありとも子の知らざる間は親心は水泡に帰しつつあるなり。我等が親の御心を頂かざる一刻一刻は親の血涙を注がしめ、親の肉身を削りつつある身なるを知れ。

この親の念力あればこそ、この放逸懈慢の我身も眼を醒まし、この強剛難化の我身も大悲深重の矢に貫かるるなり。悪しきは我等が罪業なり、「さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ、故にこの願力に遇いたてまつればこそますます我等の罪業深重もおもい知られ、親心を知らして頂ける後にても、なおます〳〵我が罪業の深きことを慚愧するなれ。まことによくよく煩悩の強盛に候にこそとは、我等が娑婆の縁つくるまで相続する慚愧なりけり。

悪を為さしめて助けたまうと云うは真面目の信念より出ずる言にあらず、つまり悪しきものでも助けたまうという横着心の変形にすぎぬ、これ警むべきなり。親の金を費し、親を心配せしめて、曰く、かく我にあたえる親の恩恵なりと、唯金を喜び費して、その金を作りあたえし親心の血涙の結果たるを知らざる言なり。その親心をいただきて初めて一念発起の下に罪悪を慚愧すべし。

されど世人のその罪悪の者でも助けたまうという横着心を責めて、罪悪の者でも助けたまうなれどなるべく罪悪を犯さぬ様にせねばならぬという自力修養に陥ることも警めざるべからず。横着心と、殊勝心と、畢竟大慈深重の親心を知らざる同じ間違いより来れるなり。たとえば富者ありて貧者に向て曰く、我汝の借金を引受くべし、毫も心を労すること勿れ、という。貧者曰く、彼人の親切感謝するに余りあり、彼人の親切と金力とを疑うにあらざれども、我借金は実に多し、表面に現れたるを彼は知る所なるも、我には隠せる借金あり。我これを暴露せんか、彼もとより引受けくるること疑いなしと雖も、そはあまりに恩寵に慣れたるなりとためらい、なお自らその隠せる借金を弁ぜんとせば如何。この時に処する信仰の心持や如何ん。もし我より打明けんと試むるも、とても〳〵不可能なり。

若し富者一歩進めて曰く、我汝の心を労する所以を知る、汝の隠せる借金を我知らずと思えるにや、心おさなきことかな。我汝の借金を引受けんと言う所以のものは、特に汝の隠せる借金に心を傷ましむるものあるを知ればなり。汝の心を労するはこれ〳〵ならんと、仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり。ここに至りて人なんぞ隠さんや、我等がこの罪悪の底の底までも見透して助けたまわんとの大慈深重の御親心に対しては我等の罪悪深重煩悩熾盛の心の底まで融かされて、功徳の宝海みちみちて煩悩の濁水へだてなし

願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば、散乱放逸もすてられず

これ実に本願力のやるせなき親心に遇いたてまつりて、遂に空しく過ぐる能わざる強縁なり。南無阿弥陀仏々々々々。

（求道・第七巻第五号）

波岡茂輝歌集

鳥籠ゆこぼれし稗を拾ひつつ雪のさ庭に雀おりたつ

飼はれたる小鳥うたへり籠の外のこぼれ餌あさる鳥もうたへり

我が霊もかくあらまほし大海の水平線に昇る朝日子

和田つみの広きをのぞみ大空の高きを仰ぎわれ岸に立つ

大海に一掬の水そへしごと我が世に交り生きてありけり

向日葵の陽をしたふごと我がこころ大いなるものしたひてやまず

葉雞頭の苗二三寸延びにけり紅に燃ゆべき色すでに見ゆ

三願転入に就いて

福島政雄

今日は十八、十九、二十の三願、むづかしく言いますと三願転入に就いて申し上げます。聖人御自身が教行信証の中で、自分は第十九願に行こうとして徹底出来ず、第二十願でも徹底出来ないで、遂に第十八願で徹底したと申されて居ります。言葉は非常にむづかしく申されていますが、第十八願で落着いたと告白せられています。聖人のその心持にもとづきまして三願の関係、私共の心と三願とがどうなるかを申し述べたいと思います。

第十八願のこころ

さて十八願のこころを一口で申せば、法蔵菩薩のまことが私共にとおることであります。その法蔵菩薩とは、まことのいのちのかたまりとでも申しましょうか、まことがいのちとなって私共のいのちにかようて、私共のいのちを呼びさまして下さる根本のまことの働き出るかたちであり、いのちであります。法蔵とはみのりのくらであります。大きなまことのいのちが動き出ようとしてまだ蔵の中におさめられている姿であります。蔵の中にまことのいのちとなって、それがやがて出現し、働き、そこに十八願があります。

さて十八願に至心、信楽、欲生が誓われてあります。至心とは、法蔵菩薩のまごころが私共のいのちにとどいて下さるのであります。その働きかけが信楽と欲生の二つになるのであります。信楽とは信じてねがうとの意味であります。昔の講者も、信楽とは仏の智恵の現われであり働きであると申して居られます。欲生とは仏の慈悲の現われであり働きであります。

仏のまことが、仏の智恵となり、私共の心の隅々まで照らされ、私共がそれを身にうけて、それが願わしいまことの境地となり、私共の姿がそこに見えて来るのであります。するとそう云う世界に生れたいとなり、真実の世界を求めたい心がおこされる、これは仏のまことがとおっておこる心であります。それをおこさして下さる、そこにお慈悲の

働きがあります。仏のまことが斯様に智恵と慈悲とになって私共の生命に働きかけ下さる、それが至心、信楽、欲生となっているのであります。

一心という言葉は大無量寿経の下巻の五悪段のところに人間の罪悪煩悩の姿をこまかに示されてありますところに「一心制意、端身正行」とあります。この一心と十八願の至心とが一つであります。至心、信楽、欲生は三つでありますが、働きは、仏の一心の働き一つであり、これが私共の生命にひびく、その結果乃至十念となる。乃至とはすくないものと多いものをつなぐ言葉で、一念乃至十念であり一念とは一度南無阿弥陀仏と申す、十念は十遍念仏することでありますが、広い意味では一生涯申す、この身がなくなる、その時までの一生涯の念仏であります。仏のまことが我々にひびいて、一度の念仏、又は一生涯申す念仏も、皆その人を仏のまことの世界に生れさせて頂けることになるのであります。それには「若し生れずば正覚を取らじ」と云う力強い誓いがあります。このまことの世界に、一度でも念仏した者が生れないならば自分のさとりはひらけぬとの誓であります。それですからまことの心が衆生に徹するのと、仏のさとりをひらくのとが同時になって居ります。一切衆生が自分の心持を受け容れるというところにさとりがひらける。一切衆生を問題として、生命をかけて十八願を建てて居られるのであります。「若不生者」若し生れずば、「不取正覚」正覚をとらじ、とは強いお言葉であります。一切衆生、いかなるものもまことの世界に生れさせたい、この仏の心持が衆生にひびいて、衆生が一度でも我名を呼ぶものは、そのとき必ず我国に生れることになる、それは自分の生命がけの問題である、斯う云う心、これが仏のおこころであります。

十八願の末尾に「唯除五逆誹謗正法」とあります。五逆罪とは、父を殺し、母を殺し、聖者を殺す、僧侶の和合を破る、仏身より血を出す、というひどい悪いことであってその重罪の者と、又正しい法を謗った者は取り除くとあります。

一体この唯除以下はどうしたこころでありましょうか。法蔵菩薩は一切を摂し給うのでありますが、釈尊が斯様な重罪人は除くと云われて居ります。

これに対しましての昔の人は、それでは観経はどうなるのであろうか。観経に九品の往生が説かれてあるが、下品不生の機類は五逆の罪を重ねた極悪の人である。不善業を作り五逆十悪の罪人である、そういうものも死に臨んで善い友達が「お前はただ念仏を口に申せばよい」と南無阿弥陀仏を称えさせる、すると五逆十悪の者が、まことの世界に生れさせて頂けると観経にはっきり説いてある、すると、

唯除は釈尊のお言葉としてどう云う意味があるのであろうか。

これにつきまして近角常観先生が実話として話されたことがあります。それは福島県相馬郡中村での出来事であります。そこに大切な息子が中学生の頃に不良化して了った。父親は「お前の様なものは家におけぬ、勘当だ、出て行け」ときびしく叱った。この子はすごすごと家を出て行った。その時母親を呼んで「お前はあれに小遣銭をやったか」と問うと「やって居りません」と答えた。すると「馬鹿！」と大声で叱った。このことを近角先生が度々話されました。唯除のこころは父親の心である、お前の様な者は勘当する。出て行け、の言葉である。但しその父親は「小遣銭を何故やらなかった、馬鹿」と言う父親である。これが弥陀の本願と釈迦の抑止との関係であります。成程聖人の御述作の中には「唯除五逆、誹謗正法」をば、その罪の重いことを知らせるために云われたので、皆をすくい入れ、摂り入れるためであると云われてあります。然し、唯除は強くおごそかにひびいて来る。私自身が五逆謗法の者と解るのであります。そうでないと、自分は第一に仏から呼ばれている、一番先に生れる者と言うように甘く考える。私はとくに甘え児の気分を持って居りまして「至心、信楽、欲生我国乃至十念」というだけでは、必ず生れる、一切衆生のこらず生れるとありますと、そこにお慈悲があると甘え気味になります。そこで「唯除五逆」と、とりのけだと言われて見ると段々自分が五逆の徒、謗法の輩と知れて参ります。

自分はまさかそう云うもので無いと思い度い、善く思い度い。五逆とか謗法とかは大それたことである。自分も悪人ではあるが、五逆や謗法の重罪人ではないと、自分を善く思うて居ります。

そうですから「五逆謗法の汝を除く」ときつく言われないと、そう言う者でないと思うのであります。私もこの年になって、六十過ぎまして段々そう思うようになりました。自分はそうでないと思うて居りましたが、自分もそうであったと、実際の生活の上で気付かされます。それはするどく言われて始めて気付かされるので「お前はよい奴だお前を何時でもひきとってやる」では、仏の至心、信楽、欲生のこころが徹しないのであります。

払自身が甘えた心で人生の行路を辿って居ります。そこに五逆謗法の者であると種々の機会に見せつけられると、始めて自分の五逆謗法の姿がわかるのと、仏の至心、信楽、欲生の心が徹するのと同時になるのであります。自分がよい子であると云う風では、仏のまことが徹したつもりでも実は徹していない、唯除の一句は大事なことで、それがなければ十八願は甘くうけて解らぬじまいになります。唯除

五逆誹謗正法の言葉が人生のつまづきを縁として、私の真の姿が照らし出されて、仏の至心、信楽、欲生の御心が我身に徹する、私自身はそうなって居ります。

それでこの唯除の言葉は釈迦の抑止と領解される。釈迦仏がおさえ、とどめておいでになるのであります。

釈尊は五逆の悪人や謗法の罪人があれば、それが釈尊御自身の問題である。これがある限り自分の問題として苦しみ続けて居られるのであります。私共の五逆謗法はそのままに釈尊をお苦しめ申す姿であるとなりますわけであります。私共は父を殺すか母を殺す、そんなひどいことはしないと思うて居りますが、刃物で親をバラバラにしないが実際に親を苦しめて死ぬるような苦をさせている。私も、今頃になって反省いたしますと思いあたることが数々あるので、これもすこし解るのであります。

自分は親というものを殺すようなことして生い立って来た、これは種々の問題で解るのであります。男は結婚について親を踏みつけ、親の息の根を止めるようなことをしています、そこに五逆とはよそごとではありません、自分の問題と感じます。そうでありますから五逆謗法とは自分の急所をさされるのであります。人間は急所をさされるとそうでないと言いたがるものであります。友人や何かに急所を衝き当てられると必ず反抗するものであります。唯除五逆と釈尊から急所をさされると、自分はそんな者ではないとなる。それでありますから十八願を我身に受け容れることは生やさしいことではありません。

大経下巻の悲化段と五悪段に、私共のこの世の生活の悪いところを一つ一つこまかに述べてあります。そこを読みますと、自分はそうでないと言えない、私は三毒の煩悩、五悪の相がピタリピタリと解るところが大いにあるのであります。私自身も五悪段の第五の悪のところを、私が二十七歳の三月十一日の晩に、御仏前で読みまして、よそごとではない、自分の事であると知れ、非常に感激して泣き伏しました時、その時から五悪段がわがことと解り始めました。それも私が親に反抗し続けていた問題が縁となったのであります。

唯除五逆、誹謗正法とは大切な問題であります。そしてよそごとでない三毒五悪の自分の正体が解り始める時、唯除の言葉が身にひびき、至心、信楽、欲生の仏のまことが、我身にしみわたるものであります。そうですから生やさしく受け入れられるものではないと感じます。

菅瀬芳英師語録

西本清人

迷と知る道

迷の世界にいる者は「我は迷うている」と、どうして知ることが出来ようか。井戸の蛙は自分は今どこに居るのか、井戸と世界とはどちらが広いかも知らない。

先覚者から「お前は実際迷界にあるぞ、誠にあぶないことである」と、教えていただいて、始めて「我は迷いの衆生である」と了解できる。わが迷いが知らされた時、道を求めずには居られなくなる。

不急の事を争う

人は大きい石に躓くものはないが、小石にはよく躓くものである。我等は日常「不急の事」にはいろ〳〵心を煩わすが、往生の一大事には心をかけず、地獄に堕ちることを何とも思わぬ、あさましいことである。

桂公の聖人讃仰

親鸞聖人六百五十回忌に桂公爵が本願寺に参詣して、折から参拝中の数万の信者を見て驚歎して曰く「聖人は何という英傑であろう。聖人と同時代の源頼朝の如きは、当時征夷大将軍となって、威風が高かったが、その死後は実に淋しいもので、彼の墳墓がどこにあるか所在さえ知れぬ。まして誰が彼に廻向の水を捧げるであろう。今では忘れられようとしているが、聖人の徳は実に驚異にあたいする。」と云ったと聞く、まことに当を得た観察である。

松尾芭蕉翁の辞世

元禄二年に浪花で病死したが、病中に弟子達がとりあえず馳せ参じた。その時、そばに侍していた二人の弟子が、「辞世の句を頂きたい」と請うた。

ところが芭蕉が答えていうには「ことさらに辞世の句を作る必要はない。昨日私が詠んだ句は今日の辞世である。今日の発句は明日の辞世である。今日まで作った句のすべては辞世でないものはない。わが辞世如何と人が聞いたらどの句でも抜き出して辞世であると云うてくれ」と答えたということである。

事実を事実と知る

『論註』下には「如来とは法相の如く知るが故に」とある。この意味は、如来とは如実に世間を識知したまえる方に名づけるというのである。如来は実に境の事相をありのままに体得せられた方で、事実を事実と知りたまうた方である。たとえば現実の世界は無常である、無常であるのが事実である。その無常を事実のままに悟られた方を如来と名づけるのである。この定義を反対に考えると、凡夫とは事実を事実と知らぬもののことである。無常の世界を常住であると錯覚しているのである。つまり仏と凡夫との区別は事実の通り見るか、事実に背いて見るかの差に帰する。摂取不捨の真実を事実であると思わぬから、出離の縁がない。如来の仰せを事実とし、事実のままに聞いたのが聞で、この聞のままが信である。

曲ったものを曲った物とする。

私はかって比叡山で学問していたことがある。叡山から一寸離れたある所へ、私が一日出掛けようとした。何分にも道が分らぬので、村の百姓家へ行って、そこへ行く道を尋ねた。その道は実は百曲千折している谷を通じている。百姓が教えてくれるには「この道を真直ぐに行きなさい。そうすればそこへ出ます」との事であった。

私は教えられた通りにその道を行ったが、誠にくねりにくねった道で、とても真直ぐどころではなかった。かの百姓はこんな道を真直ぐに行けと教えてくれたが、真直ぐに歩いたら谷の中に落ちて了わねばならぬ。然るに百姓がこの道を真直ぐに行けと云ったのは、道のない所でも真直ぐに行けというたのではなくて、道が曲っているそのままを真直ぐに行けという意味であったとあとで気付いた。

真宗の二種深信の信機というのもこの意味で、曲ったこの機のままを、曲ったなりに見るのである。決して自分で傍路を通って無理にも変えて真直ぐになれと云うのではない。極重悪人のこのままをお助けと信ずるのである。

ボロでも新聞紙となる

近頃は破れて形のないようなボロでさえ、立派な新聞紙となる。しかもこれをこしらえる人に真実の誠意があったのではない。いわんや大誠意の弥陀如来の願力によって、凡夫の我等が成仏することも可能である。これには何の不思議もない、疑いのあるはずがない。

聞思の力

利井鮮明和上は『御本書』の「聞思して遅慮することなかれ」の句の「聞思」をば、平たく訳して、聞いた通りをそのまま思うのであると云われたが、まことに有難い言葉である。聞いた通りがやがて信の門を開く鍵となるのであるから、聞即信である。物は信ずるに限る。この聞即信の

力は実に大なるものである。極重の罪人も仏を信ずる当体に、往生に間違いのない身にしていただけるのである。

かって日露戦争の時、満州の野を行った一隊があった。今や更に直に某地に行かねばならぬこととなったが、何分にも暑くて、また大変に道が悪いから、喉が乾いてほとんど進むことが出来なくなった。その時平常から頓智をもって聞えていた一人があったが、その人が云うのには「この向うの村には梅林がある。さあ一緒に急いで進まう」と告げた。すると不思議にもこの一隊は、梅林があると聞いて梅の実を連想し、その酸っぱいことを連想して、忽ち喉に唾液が出て、渇きを医することが出来たという事である。

信ずる力は実にここにある。隣村の梅の話をきいて、直にその酸味を思うて、信ずる当体に、隣村の梅がわが物となったので、行軍に苦しんだ一行は、忽ち元気を恢復することが出来たのである。若しこの時、疑うていたら梅の酸味も感じられなくなったであろう。

篤く三宝を敬え

聖徳太子の十七憲法の第二条に、「篤く三宝を敬え、三宝とは仏・法・僧なり。即ち四生の終帰、万国の極宗なり。何れの世何れの人か是の法を貴ばざらん。人はなはだ悪しきもの鮮し、能く教うればこれに従う。それ三宝に帰せずんば何を以てか枉れるを直さむ」とある。

「篤く三宝を敬え」と仰せられている所の、三宝とは、詳しくいえば二つの解釈があるが、仏・法・僧の三宝を宗旨と対照して見ると有難い意味がある。

僧宝を本義とする宗旨は、仏宝に重きを置かず、人師を重んずるから、所謂「釈迦何人ぞ、我何人ぞ」という見解となって、仏陀を崇むべき方としない。それゆえこの見方は仏に頼らない、自力の修行者で、これは禅宗の行き方である。

次に法宝本位の宗旨は、一から十まで法を頼り、これによって修行して仏果に到るので、これは理性主義で進むのである。これを解信解行の宗旨という。勿論学解のない者は力が及ばない。この解行を宗とする教義は、華厳、天台の二宗の如きである。この宗旨は、たとえば電話をかけるのに、電話機の構造や電気の理論を理解してからでないと電話はかけられぬとするのである。

次に仏宝を本位とする宗旨は親鸞聖人の宗旨である。一文不知の者が、「我れ精進を行じて、忍んで終に悔いざらん」と、大悲を垂れたまう如来に帰するのであるから、仏前にひれ伏すよりほかに道がない。仏を仰いで信ずるばかりである。僧宝を本義とする禅宗とは反対に立つものである。

世には仏とも法とも思わぬ人の多いのに、太子が「篤く

三宝を敬え」とお勧め下さった事は誠に有難い事である。

凡骨日誌抄（16）

——ことしも暮れていく——

西元宗助

一

晩秋の今日、はや年の暮に想いを走せながら日誌を書かねばならぬとは、まことに恐れ入った無常迅速。さて、この日頃、各方面からいただいている書籍、新聞、雑誌などの中から、これはと心うたれた歌や文を、左に書きしるす。

○

露のごと消ゆるわが身を大悲して賜わるいのち南無阿弥陀仏

生も死も超えてつらぬくみ仏のやむなき本願　南無阿弥陀仏

右は愛知県の豊橋に近い正法寺さんの機関誌に載っていた松下照雄さんの歌。

○

落ちる身を落さぬ親のあるゆえに行くておそれず今日も旅ゆく

朝の海　光りをうけて小波はささやく如くみ名よぶ如し

右はハワイの牧之段光代夫人（一九七八寂、八十六才）の歌集「りりこいの里」からいただく。先年、ハワイを巡遊した折、ヒロ市郊外リリコイの同家の家庭法話会に招かれたときの想出は深い。ご郷里は広島で、ほんとうに篤信の老夫人であられた。この遺稿歌集に「序文」を寄せられた嬉子大奥方からいただく。

○

北九州の「仏教新潮」に、門司の藤富孝霊師（本派）が「菩提樹」という随筆を書いていられる、その一筋に、御父君の五十九年目のお命日にあたって、

「父淳心公は浄土にも居らず、勿論、墓の下にもいない。常に私の血潮の中で私と同体し、往生一定、地獄一定と、

息をしてござる。南無阿弥陀仏」と。
わたしも称名し合掌したてまつる。

○

「妙好人・物種吉兵衛語録」（楠恭編）を読むと、その中に「人は仏法を聞けば、聞き顔になり、知れば知り顔になる。また仏法仏法と口にはいえど、我が身の今日の一日が仏法ということを知らぬ」（三〇一頁）とある。

まことにきびしい、しかしホントのお叱りをいただいて、ハッとする。そういえば吉兵衛さんについての物語りを、松原祐善先生が、あるときの講話で、左のように紹介されている。（「ともしび」誌から）

この吉兵衛老人が、いつものようにお同行を訪ねて旅にあったのですが、その留守宅をあずかっていた吉兵衛の老妻が俄かに中風で倒れ、全身不随になったという報せがきたというのです。それで吉兵衛さん驚いて家にとんで帰えりました、そしていよいよご恩報謝のときが到来と、老妻の食事のことから下の汚物の仕末まで全部を引受け、村の小川で汚物の洗濯をやっていました。村の青年がこれを見かねて、毎日毎日おむつの洗濯たいへんでしようと云うと、吉兵衛さん、これに答えて、いっぺんいっぺんのおむつ洗いが、仕始めで、仕終りで、二度くりかえしはない。だから疲れるということはない。ありがとうございます。と云ったというのです。

これに松原先生、説明を加えて、汚物洗いそのことが仏のお仕事と拝まれているんでしようねと。松原さんとのご縁も深い。もう五十年余になります。そのころ松原さんは大谷大学の研究科の学生、わたしは京都大学の学生。その頃から何か心に沁みる方でありました。

二

十月下旬、春からの約束によって広島にいたり、市の老人大学祭の講演させていただく。ひそかに案じていた藤秀璟先生、九十六才になり給うて床上におありとのこと。あるいは面会不可能かと案じながら、ともかく徳応寺さんの庵室にいそぐ、ガラス窓ごしに、そっと覗くと、なんと先生、お玄関の間に端然と坐して書見しておられる。これは驚歎。前以って予告申しあげない突然の訪問、その非礼をおわびして、約十分間、お話を承って稽首作礼したことであります。

先生の仰せ、さすがに足はすっかり弱りましたが、と。しかし、そのお顔は光顔巍々。そのお声は、阿弥陀経の「宮商和して自然なり」の如し、もはや浄土の住人のごとくあられた。

その夕には迎えられて能美島の明慶寺さんに着く。ここは足利浄円先生はじめ福島政雄・白井成允両先生のこられたことのあるお寺。その夜も翌日も、頼まれるままに、同和問題を中心にお話しさせていただく、しかし事柄の性質上、非常に疲れる。しかし慈光誌の愛読者、岡本信男氏らに歓待していただき、今日京都の浄住寺さんでは「一道会」の日、と、花田先生らのお噂をして法談のできたことは有難いことでありました。

○

十月二十七日（火）西谷啓治先生の「本願」と題する特別講話を、大谷大学の講義室で承る。午后二時半に始って約三時間、お年八十の老碩学が、時のたつのも忘れ、それこそ、時の中で永遠が働くという趣きの、深い深い思索の展開であった。

最後のところで、ほっと一息つかれて、一隅を照らすという、これが大事。一隅に光れるもの、自らにして部屋全体を照らしている。自得するものは、自らにして世界全体の中に生きて全体を照らすと。他力廻向の信心にはどこかに、ハッと目がさめる、肯くということがなければならぬ、いや、ある筈であると。

伝道板

渡辺　了恵

白い道

一歩　足巾、尺五寸
よろ〳〵　歩いて
七十年
不可称　不可説
不可思議だ

仏眼

目がわるく
足もとさえも
見えぬけど
四方八方
視える
眼がある

耳底に残る多田先生の仰せ

白川梅次郎

私は明治三十九年の春、はじめて山田文昭師から多田先生の人格を承り、『修道講話』によって先生の信仰を知りました。当時先生の一二年後輩の大原善俊師が非常に先生を敬慕して「今の世の中に祖師親鸞を求めるならば、多田兄であろうと思う。僕は兄を想う毎に祖聖もかくの如き風貌であったろうかと思う」と語られたことは、二十歳の私をして見ぬ先生を深く〳〵憧憬せしめました。それから後実際お目にかかったのは二十三歳の冬でしたが、爾来三十年一方ならぬ御指導を受けました。今その一二を抄録することに致します。

先生は、大正九年の春から肺を病んで重患に陥った私が漸く死線を超えて豊橋病院の一室に仰臥していた十一月二十日の朝お見舞下さいました。その時、私はこの夏に得た自得の信、ことに葬式万端の仕度まで整えられた秋の死の瀬戸際に立って動揺を感じなかった自得の信を語って御批判を求めました。

先生は厳粛に、然も痛烈に「貴方の体験は貴い、然し所謂体験の宗教、恩寵の宗教、実感の宗教を語るものの如き何になりましょう。定めなき凡夫の感情の上に築かれた信仰は、また凡夫の環境と思想の動揺によって何時でも倒壊せざるを得ませぬ。大にお考えにならねばいけませぬ。」と真向から真の救いにあらずと極言せられました。

そこで私が、然らば先生は二千五百年も前に述べられた釈尊の経典、特に真宗所依の三部経を絶対無条件にお信じになりますか、又私がこの布団を手に握っている感じほど確かに阿弥陀様を信じて見えますかとお尋ねした時、先生は実に熱心に懇切に私の無躾(ぶしつけ)な問に対してお答え下さいました。

「貴方は他へ遊学していなさる頃、お父様からお手紙を貰いなさった事があるでしょう。その時貴方は手紙の筆者則ちお父様の存在を疑ったことがありますか。又お父様が手紙の上でまるで偽りを言って見えると疑われたことがあ

りますか。又お父様が金を送ったから受取れとか、風邪をひかぬ様にせよとか、休暇になったら早く帰って来い、皆んな待っていると書きなさった手紙の文字の上にお父様の慈悲を肯定しなかったことがありますか。私の信ずる『大無量寿経』は阿弥陀様の広大無辺な大悲を端的に体得遊ばされた釈尊のお言葉をそのままにお書きなされたもので、則ち三千年前の釈尊から現在の私にお届け下さったお手紙です。御親の限りなき大悲と悠久不滅の真実性とが、釈尊のお手紙として、治乱興亡定めなき現世を転々しながら滅することなく亡びることなく、今現に私の目に耳にお届け下さったのです。

私は亡びることなく、動揺することなく、変ることのない釈尊のお言葉である経を絶対に信じます。私は経によって現に弥陀仏の御声を耳に聴き、眼に弥陀仏の御言葉を見ます。経によって弥陀仏の無蓋底の大慈悲を悟り、私をお救い下さる御誓願の思召しを体得いたします。

貴方はこの布団を握っている様にと言われますが、貴方の手は高熱に浮かされると、夢幻に布団を握ったと錯覚することもありましょう。又麻痺(まひ)していて握っていてもそれが判然とわからぬこともありましょう。然し私は眼前に差し寄せて下さった御経の上に弥陀仏のお言葉を聴き、御誓願をいただいて人間の感覚を超えて如来様のお救いを信得いたします。」

私はお帰りなさる先生に御挨拶一つ出来ぬ様な絶対安静の病苦の中から先生何するものぞ、悪魔の試みだ、死を寸前にして動揺しなかった自分の信仰がこんな一言で崩れてなるものかと反撥しましたが、一面先生のお経に対せられる御厚信は何とも不思議の感じで、危い命を前にして苦しみつづけました。そして十二月四日、再び御見舞下さった先生に、先生の御入信の実際と、他に現在の価値や念仏の位置などについてお尋ねいたしました。

先生のお話。

「(前略)私は急遽東北地方から千葉に帰って、自分の誤った前半生を清算して何とか金剛の真信を得たいと出来る限りの冥想と苦悶を続けました。然しそんなことでは何ともならず、とう〳〵二三の先輩に狂せんばかりの心中を打明けて、ひたすらその教を請いました。皆んな非常に心配していろいろ聴かせて呉れました。ある先輩の如きは、お前はそんな奴だったのか、そんな虚偽の信仰で篤信者らしい顔をしていたのか、然しそういう奴なればこそ弥陀仏の誓願があるのじゃないか。そんな多田鼎こそ、弥陀仏の目標ではないかと、拳を固め涙を振って聴かせて呉れました。私も非常に感動して泣きました。然しその涙の下からやはり、胸の奥では何を言っているのだ、そんな理論は百も承

知だ、そんなことで救われるなら世話はない。ああどうしよう、どうしようと、折角精魂を打ち込んで聴かせて呉れる先輩のもとをも空しく虚ろな胸を抱いて帰りました。

それからは机の前に座っても、文字が眼に入らず、夜寝床に入っても眠りをなさず、苦悶は苦悶を生んで座敷の中を行ったり来たり、仰いだり伏したり、喚んでみたり、果ては天理教でも基督教でも、何でもよい私を救って呉れるものはないか、何とかして貰いたい、何とかなりたいと苦痛に打ちひしがれて狂せんばかりになりました。

その或朝でした。私は家内の仕度した朝の膳に、欲しくもない食事をするために、いろいろ考えながら、ぼんやり座って、右手に箸をとりあげようとした刹那でした。実にその刹那でした、はっと私でも口に南無阿弥陀仏と称えることが出来ると思った刹那、どっと一度に、千丈の堤を切った様に弥陀のお慈悲の御言葉の数々が私の頭へ溢れかぶさって来ました。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と何時の間にか立ち上ってしまった私の口から高らかなお称名があふれ出ました。私は座敷の中をかけまわり、手を挙げ、肱を振ってお称名を続けました。涙はあふれ喜びは体中にみなぎりました。家内は気でも狂ったのかと思った様でした。実に罪悪生死の大海に沈淪して何一つ出来ぬこの鼎にも、口にただ南無阿弥陀仏と称えさせることは出来ると、久遠のいにしえからこれを見抜かせられて、ただ南無阿弥陀仏と称えよ、この御名一つを享けよとお差し寄せて下さった阿弥陀如来の宏大無限な御慈悲が、はじめてほんとうに解りました。顧みますればすべてが御親のいたらざるなき善巧方便でした。」

その後なお悩みつづけた私は十二月七日の朝、先生のお言葉をまるまる受け入れることが出来、「我が名を称えて来い」との御招喚に、すなおに御返事の称名をさせて戴きました。そのよろこびを申しあげました時、先生は、

「御親はまた一人の衆生の上に自分のお仕事が完成したとおよろこび下さいます。」

とお喜び下さいました。

念仏詩抄

木村無相

おおせばっかり

香師おおせに
〃死ぬるイノチを
向うにのばしておくゆえ
ウタガイがはれぬ——〃

香師＝香樹院徳龍師

死ぬるは今——
今なれば
うたごうている
ヒマはない
今さら信ずる
ヒマもない
ただ助くるの
おおせばっかり——

聞法

香師おおせに
〃あわれなるかな
その聞きようが
みなヨコシマになりはてて
いるゆえ
実に聞法の縁の切れたものは
僧分なり——〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

その聞きようが
ヨコシマなら
僧俗問わず縁切れか
おおせのまンま
聞くばかり――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

力なき身は

香師おおせに
〝とても助かるまいと思うは
凡夫のこころ
助けてやるぞとのたもうは
仏のお慈悲なり
よく〳〵ここを
聞きわけられよ――〟
聞きわける

力なき身は
よき人の
お聞かせをただ
あおぐばっかり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ああ我がムネは

香師おおせに
〝すこしたしなみが出来ると
はや善人になりたような
驕慢（きようまん）の
おこるのは
我がムネの明らかならぬ
証拠（しようこ）なり〟
ああ
我がムネは

底なしのドロ沼（ぬま）
ワレは善人――
ヒトは悪人――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

おおせばかりが

香師おおせに
〝聞き分け知り分けた位で
極楽まいりが出来るのなら
坊主はみんなお浄土に
まいらるる
聞き分け知り分けた位で
浄土にまいろうと思うは
ヒガゴトじや
如来様のおおせばかりが
真実じやぞや――〟

聖人おおせに
〝ただ念仏のみぞ
マコトにておわします〟

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如来さまが

香師おおせに
〝聞く機になりてみれば
聞きがたい仏法
はなれがたいはウタガイなり〟

聞く機にさせた如来さまが
聞きがたいは仏法なり
はなれがたいはウタガイなりと
〝大悲ものうきことなくて〟
照らし知らせてくださるる

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

信心に就いて

花田正夫

俗に、鰯の頭も信心から、というように、どんな宗教も信心が中心になっている。その信心に強弱濃淡なもの、通俗なもの、高尚なものと種々なものがあるが、自分の力をもとにした信心は、有為転変するし、特に無常の嵐の前には吹き消されてしまう。

さて、親鸞聖人は、特に大信心を勧められて、私共の持ち合せの智恵や経験にもとずく信心ではなく、生死に障えられぬ仏心の絶えることのない慈育によって、点滴が岩をも穿つように、頑迷な私共の心に徹して下さり、疑うことが出来なくなった信心、換言すれば、仏から与えられた大信心を讃仰されている。

然し、ひとえに仏力による信心と聞かされても、自分が仏心を知ることも、また信ずる力もない身に気付かない間は、ひとごとに聞き流すばかりで、私のこととならない。親は子になくてはならぬことのために昼夜に辛苦するように、仏が私共をお見抜き下さって、信ずる力も、近づく足もない身だから、そこを憐れまれて、必ず救い遂げずばおくまいと、微塵のためらいも疑いも持たれず大悲の御手をさしのべて下さるのである。

私はかつて「信ぜよされば救われん」という教えをきき、信じよう、疑うまいと種々苦心したけれど、英雄にして初めて英雄を知る譬のように、神のまことも、自分にまことのない身には、どうしても信ずることが出来ないことに行き詰り　どんなに美しい緑の島があっても、罪の潮から離れては生きられない人魚の身を歎くばかりであった。

この時、幸によき人々に導かれて歎異抄を読み、親鸞聖人に心ひかれ、教行信証をひもとくと

「無始よりこのかた一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繋縛せられて、清浄の信楽無く、法爾として真実の信楽なし」と、煩悩具足、罪業深重の凡夫には信楽の出来ない身と観破してくださり、

「ここに如来は、苦悩の群生海を悲憐して、無碍広大の

浄心をもって、諸有海に廻施したまえり」と、

一切のよき教えからも逸脱する身に、ここまでおいでで なく、信ずる力さえもない身になりきって下さって、さしのべてくださる弥陀の大悲のましますと知らされ、永年の間迷い抜いた闇黒の身に光明がさしそめたのである。

○

国木田独歩の病床録に

「我が生の孤独と荒涼と不安に堪えず、何物か神秘の力に頼らんと欲する情、極めて切なり。この生死の境に迷える余は、かねてより導きをうけ信頼せし植村正久氏の慰問をうけ、氏は〃ただ禱れ！〃という。しかれども余は禱ること能わず。禱りの言葉は極めて簡易なれども、禱りの心は難し。誰か来りてこの禱り得ぬ心を救わずや。余は衷心より禱りを捧ぐるを得ば、その時直に救われ得べきと信ず。

五月十九日午後、独歩氏病床に泣く」

とあるが、かって○医大の学長だったT先生が、

「自分は四十年前から賀川豊彦牧師に導かれて、聖書を読みつづけてきたが、真実の禱りの出来ぬことに行き詰っていた。

今度、幸に親鸞聖人の教えによって、この禱り得ぬ者を救うて下さるお念仏のいわれを知らされ、永年とけなかった心の氷が溶かされた」

と、感銘の深い書信をいただいたことがある。

噫！弥陀廻向の大信心かな！これこそ無明長夜の燈炬であり、生死大海の船筏である。私ははじめ何とかなれると、わが身をたよりにしていたのが、仏の光明に照らされて、邪見驕慢の悪衆生とは自分のことであったと慚愧し、その身にそそがれる大悲を謝しまつるばかりである。

昭和五十六年十一月十六日誌

（註）この原稿は在家仏教誌に依頼をうけ「信」について何か随想を書くようにとのことにこたえたものでありますが、丁度私が名大に入院する前日までに、慈光誌の原稿を作らねばならなくなり、そのまま写して転載させていただきました。御諒承願います。

あとがき

師走に入り、寒く忙しいことと存じます。私は十一月十七日に、名大病院に入院、加療して貰っております。臼杵先生は

病をは国師の君にまかせつつ
　御名称うる日の　こころやすけし

と最後の御病床で詠じられましたが、私どもも何事も国師の御手にまかせております。

とても十二月号は発行出来ないと案じていましたが、三種郵便物は二ケ月続けて休刊しますと許可されませんので急いで編集いたしました、御賢察願います。

○

なお本年は、年末、年始を欠礼いたします。来春には恢復することと存じますが、法縁は、一道会を月一回、第二日曜の午后とヨ定しております。

○

十二月は近角先生の御忌月であり、仏陀成道の月とて、禅家には臘八の接心で、真剣な修行が続けられますことでありましょう。

北米の誌友が、本願を聞きたいと申されましたので、福島先生の四十八願講話の中から三願転入の大切なところを記載させていただきました。

菅瀬芳英師は広島県の御出身でありますが、東京で同和学園を創立され、沢山の人々に法灯を掲げて下さった方であります。

又白川梅次郎様は蒲郡の方で、教育界にありながら多田師の導きを受けられて、念仏の生涯を送られました。御子様達は揃って聞法の人となっていられ、尊いお方であったと今更ながら驚いております。安城の山本博雄様の筆録からいただきました。

木村無相さんは退院も僅かで十三日に再び武生市府中一の林病院に入院、心臓の手当をしてはと医師から勧められながら、都合で、通院、和上苑で静養されます由であります。御無事をと念じております。

御案内ヨ定

一月第二日曜午后一時半、
一道会例会。一道会館の南隣り、
南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角
地下鉄、新瑞橋下車

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午後一時半
一道会例会、一道会館の南隣り
南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目　角。
地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。
市バス、御器所通り又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。
（但し日曜を除く）尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　八〇〇円（送共）
　　一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
　　振替口座　名古屋一〇四七〇番
　　郵便番号　四五七

慈光　第三十三巻　第十二　昭和五六年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可